

教職大学院

Newsletter

No. 30

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2011.04.02

福井大学の教師養成教育に期待する

茨城県美浦村教育長（筑波大学名誉教授） 門脇厚司

今年（2011年）の2月26、27日に行われた福井大学の「ラウンドテーブル」に招待され参加しました。余談ですが、ラウンドテーブルに最初に招かれたのは福井大学教職大学院がスタートした年度（2008年度）の終わりの3月でしたが、外国から帰国した翌日に居眠り運転で大事故を起し3カ月入院し退院して間もなくであったこともあり福井に来ることができず、森先生はじめ関係者には大変迷惑をかけることになりました。この機会をかりて深くお詫び申し上げます。

そんな経緯もあり、今年は喜んでまた勇んで参加させていただきましたが、私をそのような気にさせたことにはもう1つのわけがありました。それは10年以上も前から、ということは、筑波大学で教鞭をとっていたときから、地域に根を下ろした福井大学の教員養成の新しい試みに注目していたからです。福井大学が地域にしっかり根を下ろし地域に貢献できる教員を育てることに大きく舵を切ることになったきっかけが、教育学部の卒業生の地元での教員採用率が大きく減少し学部教員の間に危機感が募ったことにあると理解していますが、どのようなきっかけであれ、「教師たるもの地域への関心と貢献意識なくして良き教師たる資格なし」と考えていた私が、福井大学の新しい挑戦に注目することになったのは必然であったといえます。

私は小学校の5年生の頃には地元の中学校の先生になると決めていました。そして、大学では教員史研究の第一人者である石戸谷哲夫先生の指導を受け優れた教員史研究を読む機会を得たこともあって教員の社会史研究にも手を染めることになりました。そんなことが重なって日本教師教育学会の創立に関わることになり、全く想定外のことでしたが、教師教育学会の4代目の会長を務めることにもなりました。そうした行きがかりもあり、私なりに教師としてのあるべき姿とか教師が備えるべき資質能力について発言もし文章を書いたりもしてきました。そんな時に、私がこれからの教師に求められる能力としてあげていたのは、①研究能力、②省察能力、③社会力、④社会見通し能力の4つでした。

こうした能力を、簡単に要約すれば、(a)教師も自分の教育実践を振り返り、相対化（客体化）し、記録し、それをもとに同僚たちと話し合い、意見を求め、省察し、よりよい教育実践に進化させ実践することを繰り返すことで教師としての自分を高めていくことができる能力であり、(b)保護者はもちろん、広く地域の住民と良い関係を作り、地元の多くの人たちの力を学校教育に取り込み協働することができる能力であり、(c)子どもが大人として生きていく社会の先行きを見通し、そのような社会で生きていく子どもの未来の姿を思い描きつつ、だからこの子のために、今、私は何をこの子に教え何をしっかりと育てなければならぬかを考えながら教育することができる能力ということです。

この度、私は二日目のセッション3のラウンドテーブルにも参加しました。参加したテーブルの人数は7人で実践報告者は3人でした。参加して私がまず思ったのは我が国の教師の質の高さであり、それを支える授業研究の質の高さでした。書き出すと長くなるので端折りますが、アメリカをはじめ外国の先生たちは日本の教師に学びたがっています。学びたがっているその熱は年々高まっているように思います。そして、日本の教師の質の高さを支えているのが授業研究（Lesson Study）であり研究授業であるという理解も広がっています。福井大学教職大学院のラウンドテーブルはまさにその質の高さを示すものでした。その質の高さを実現し保証しているのが、丸々1年学校に出向かせ、学校での実践を踏まえた長期実践事例研究を行うインターンシップを軸にしたカリキュラムを用意し実行している福井大学教職大学院の教師教育であることは明らかです。その方向は私が考えていたものと一致するものですし、そうした教育によって培われる能力もまた私が教師に期待した資質能力とほとんど重なるものです。そうした教育を持続し質を高めていくのは並大抵の苦勞とエネルギーではないはずですが、しかし、その苦勞に耐え、我が国の教員養成を革新する先駆けをなしているという自負と誇りをもって、一層力を尽くしてくれることを願うものです。

内容

福井大学の教師養成教育に期待する (1) ラウンドテーブル特集 (2) 教職大学院運営協議会を開催 (15)
退任のご挨拶 (16) 日本臨床教育学会設立総会に参加して (19) 2010年度 長期実践報告の目録 (19)

ラウンドテーブル特集号

2011年2月26日(土)、2月27日(日)の2日間にわたり福井大学において「日本の教師教育改革のための福井会議2011」および「学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2011」が開催された。1日目は、セッションⅠ～Ⅳを設定し、ⅠとⅢではゾーンA(学校)、ゾーンB(教師)、ゾーンC(コミュニティ)に分かれて実践に学び合う広場およびテーマ別の話し合い、Ⅱでは社会力・教師教育の展望・アジアの教師教育をテーマに3つのシンポジウム、Ⅳでは教師教育改革・専門職改革のデザインについて福井からの発信を行った。さらに2日目はラウンドテーブルの真髄とも言えるクロスセッションで、それぞれ実践報告を聞き合った。350名を超える参加者の熱気あふれる語り合い、聞き合いの様子をのぞいてみたい。

1. 専門職として学び合うコミュニティを培う

Zone Aでは、「専門職として学び合うコミュニティを培う」というタイトルのもと、富山市立堀川小学校と福井大学附属中学校の先生方から、その実践と教育理念に関するお話を伺った後、全体討議を行った。討議は多様な観点から進み、実に多くの事柄について議論が行われたが、全てについてここで述べることは難しい。そこで本文では、二つの学校の実践報告を踏まえた上で、報告と討議の中心にあった、教師の「コミュニティ」、「繋がり」について考えてみたいと思う。セッションでは、教師を取り巻く数々の「繋がり」についてのお話を頂いたが、それらは大きく分けて三つあるのではないかと考えられる。

第一は、教師同士の「繋がり」である。堀川小学校の実践報告では、授業実践において、ベテランの先生に夜遅くまで相談にのって頂いたという新任の先生のエピソードを聴かせて頂いた。また、福井大学附属中学校の報告からは、自分がわからないと思ったことを、同僚にわからないと相談できる環境の大切さについてのお話を頂いた。両学校共に、同僚の先生方とのあたたかな関係性を基盤とした上で、学びへの新たな挑戦を行う意欲が個の教師の中で培われていた。教師同士がオープンな状態でいられることにより、それぞれの知を通わせて、更に大きな学びの創造に繋げていくことができているのではないかと感じられた。

第二に、子どもと教師間の「繋がり」が挙げられる。子どもを「みとる」という言葉が繰り返し、討議の場で登場していたが、子どもに寄り添った学びを創り上げていく上で、子どもと教師の間に繋がりを形成することの重要性が実践報告で述べられていた。堀川小学校の先生の「担任の教師よりも子どもの事を知っている」という言葉が非常に印象に残っている。子どもを子ども全体として理解する

東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻
教育心理学コース 三輪 聡子

のではなく、個々の存在として認め、教室の中からひとりひとりを見つけ出していく。この意識の高さや子どもへの関わり方が、子ども自身の学びへの意識に繋がり、子どもと教師間におけるオープンな学びのキャッチボールを可能としていくのではないかと感じた。



最後に学外との「繋がり」が挙げられるだろう。自身の学校での実践を言葉にすることによって、その実践を客観的に「振り返る」ことが出来る、と様々な学校の先生方がお話されていた。自身の実践を通して感じた事、考えた事を、学校の外の人に伝え、フィードバックをもらうことによって、もう一つの目から自分の気付かなかった新しい観点到アプローチする事が出来る。そして、また、言葉にすることで自身の中でもう一度その実践を感じ直す事が出来、実践時とは異なった学びや思いと出会うことが出来るのではないだろうか。

今回、ラウンドテーブルに参加させて頂き、現場の先生方の生の声を聴かせて頂くことが出来た。それぞれの学校の取り組みの多様性や共通して持ち合わせている学びへの意識を知ることができたと思う。専門や職業という垣根を取り払った意見交換の場の重要性を認識するとともに、「コミュニティ」や「繋がり」という言葉の持つ意味を再度考えていく必要があると感じた。

北海道大学大学院教育学院博士後期課程 市原 純

北海道大学の大学院生の市原と申します。1 日目だけ参加させていただいて、北海道の札幌市にある定時制高校 2 校、札幌星園高校と札幌大通高校について、実践のご紹介と意見交流を、ポスター発表とクロスセッションの場でさせていただきました。クロスセッションの前に、他のポスター発表を眺めてみて、「僕の発表内容は、皆さんの関心とは合わないかもしれないなあ」と思ってしまい、クロスセッションの前に実は少し意気消沈していたのですが、クロスセッションが始まってみると、参加していただいた皆さんからたくさんの貴重なご意見をいただくことができました。参加していただいた皆さん、暖かく、そして真剣に私の実践紹介と向き合って下さり、本当にありがとうございました。

私が実践紹介した内容は、「学校が福祉的な取り組みに手を伸ばすこと」というものでした。クロスセッションでは、「学校が福祉的な取り組みをしても、先が見えず、先生方はむなしさを感じるばかりだ。教育の取り組みをしっかりと行って、その子どもが明るい未来を切り開いていける力を伸ばしていくことも重要ではないか」とのご意見をいただきました。

私の方からは、札幌大通高校で今、先生方の中でキーワードになりつつある言葉をご紹介しました。それは、「どころではない」という言葉です。学校生活どころではない子ども、卒業後の進路どころではない子ども、そんな子どもたちが、学校にはたくさん在籍していると思います。一見、とても無気力で怠け者のように見える子どもや、問題行動ばかり起こして先生に対処の手間ばかりをかけさせる子どもも、その子どもの様々な背景を知っていくと、「どころではない」生活環境を過去や現在に抱えているケースがよくあります。それは子どもだけではなく、その親御さんも、子育てで「どころではない」生活環境を抱えているケースがよくあります。

もちろん、教育の取り組みはとても重要です。どんな子どもにも公平に、自分で選んだ明るい未来に向けて歩いていく力を育てていける機会を提供しなければなりません。でも、それと並行して、教育を受ける「どころではない」現実を除去するアクションも、同時に試みなくてはならないと思います。生育歴のどこかの段階でそのアクションを起こさなければ、その子どもは孤立や暴力/被暴力の嵐に

巻き込まれ続け、その子どもが大人になっても「どころではない」現実にもまったく変化がないことになってしまう。

「どころではない」現実が、世代的に再生産されてしまいます。明るい未来を切り開くためにも、学校が福祉的な取り組みに、ちょっとでも挑戦すべきだと、そんなふうに思っています。

本大会のテーマは、「実践し省察するコミュニティ」だったと聞いています。その実践や省察が、「教育」という領域に閉じているということはないでしょうか。初日の門脇厚司さんの講演で、これまでに存在していた発展途上国と先進国との間の埋め難い格差が、現代では先進国の内部にも埋め込まれ、超え難い格差が日本国内の人々にも生じている、というお話がありました。そうであれば、その格差を解消する方向へ、ストレートにアプローチするような取り組みに、学校が挑戦するという方向性が、なぜこんなにも少ないのでしょうか。〇〇力をつける、というように「教育」の領域へと話を回収させてしまい、結局はこれまでの教育の取り組みを充実させようという方向へ、話がそのまま収斂してはいないでしょうか。そのような歯がゆさを感じているのが、私の今の正直な気持ちです。

「格差」から「貧困」へと、危機的状況が叫ばれるようになった日本社会は、今回の震災で、また次のステージに入ったのかもしれませんが、おそらく、より悲惨な方向へ。まずは何よりも被災地への支援や復興が最優先される状況ですから、これまでの教育予算や社会福祉の予算は大幅に削減されるかもしれません。様々な産業がストップせざるを得ない状況のため、ここ数年は景気が好転しないことは確実でしょうし、これから社会に出ようとする子ども



たちの展望は、厳しいものにならざるを得ません。学校にこれからやってくるだろう子どもたちの日々の生活も、きっと益々苦しいものになると思います。

参加者の方のおひとりから、「自分も昔、『どこではない』現実の子どもと向き合い、できる限りのことをした。関係機関に連絡調整もしたが、関係機関にはたらい回しにされた。学校の中では孤軍奮闘を強いられ、その子どもの未来も、あまり変わらなかったと思う。正直な気持ちを言うと、もうあのような取り組みはしたくない。スクールソーシャルワーカーの方など、他の誰かが、そういう取り組みをしてくれるなら、そちらの方へお任せしたいと思う」という感想をいただきました。こういう先生のお気持ちこそ、しっかりと受け止めなければならないと感じました。

様々に困難を抱えている子どもの状況は、簡単には変わりません。こうすれば、魔法のように状況がよくなりました、ということは、まずない。少し状況が良くなったかと思えば、またダウンしてしまう。周囲の方々がどんなに一生懸命やっても、うまく状況が好転せず、関わった方々が裏切られたかのように感じてしまうようなケースも、きっとよくあるのだと思います。

でも、先生がそんな子どもと関わりを持ち続けることは、やっぱり限りなく貴重だと思うのです。今の社会では、きっと思っている以上に、そういう関わりをしてくれる人が、ほとんどいないのです。だからこそ、それはたまたまなく大事な行為です。仮に、その子どもの状況が悪くなっていったとしても。

同時に思います。僕のこのように書いている文章が、先生方を追い詰めるような、脅迫的なもののように、響いてほしくない。この文章を読んで「もっと先生、がんばってください」と言われているような印象を、抱いてほしくないのです。それぞれの現場の人々の、やれる範囲、できる範囲で、ということなのだと思います。今学校にいる子どもたちや、これから学校にやってくるであろう子どもたちとの多くの出会いの中で、なるべく多くの貴重な関わりを持っていくために、そういう戦いを長く続けていくために、先生方にはどうか無理をしすぎてほしくないと思うのです。そして、そんな先生方を支える環境を、何とか整備しなくてはなりません。そういう格闘の中にある先生を孤軍奮闘させず、先生方同士で様々に対話できる場を、学校の中に徐々に創り出していかなければなりません。そして学校だけではなく、他の領域・分野の行政制度との連携をスムーズに進めていくための方策が、何らかの形で取られていかなければなりません。

今回のクロスセッションに参加させていただき、そんな様々なことを新たに感じることができました。本当に貴重な機会でした。あらためてお礼を言わせて下さい。本当にありがとうございました。

〈異人〉たちの交響へ ― 埼玉県立新座高校の改革

埼玉県立新座高校教諭 金子 奨

埼玉県立蓮田松韻高校校長・前新座高校校長 柿岡 文彦

教師と子どもの〈学び〉を核にした学校改革の必要性が叫ばれて久しいが、高校の改革はなかなか進まない。それは、〈学び〉を阻害する要因が、とりわけ高校に根強く作用していることを物語るだろう。

〈学び〉を阻むものは、「受験」を口実とした教師の一方的な「教え込み」である。〈教え〉は〈学び〉を誘発し、〈学

び〉に補完されてはじめて実現するものだが、「教え込み」は教師の視点とことばで教室の隙間を埋め尽くしてしまい、〈学び〉を窒息させる。そこでは他者のまなざしと声が奪われている（金子奨『学びをつむぐ』参照）。

他者がいないということは、そこが一義性に支配されたプライベート・ゾーンであり、私物化された空間であるこ

とを意味する。管理職・担任・分掌・組合・学年等々による私物化が、〈学び〉の生ずる隙間を学校から放逐する。〈学び〉の核心をなすものは対話であり、対話は他者との相互的な〈あいだ〉に生成するものだから、隙間のない親密圏では〈学び〉の可能性は薄い。

私たち二人は、そのような意味での〈学び〉の実現が難しい学校に同時に赴任した。柿岡は校長として、金子は教諭として。

金子は、協働的な活動を授業に導入し、そこに学生、院生、研究者、他校の教師たちを招き寄せ、それ以前とは異質なまなざしとことばを学校に呼びこむ媒体となる。

他方、柿岡はその動きに触発されつつ、校長室のソファを楕円のテーブルに替え、そこを教師や生徒との対話の場へと転換させていく。

肝心なことは、対話のさなかに柿岡が、学校の管理者ではなく、教師の教師としての校長へ、よき学び手へと自らを変容させていったことである。ゆたかな資質に恵まれた学校図書館司書と出会い、読書の領域と量を格段に広げつつ、「何でも見てやろう」という姿勢で学校内を歩き回り、

教室に出入りし、あるいは、外へと出かける。校長の呼びこむ外部の風が、学校に新たな可能性を孕ませていく。

こうして二人は、境界線上に立ち続ける〈異人〉として内と外を媒介し、学校を定常開放系のごとき動的な場へと変えてきた。もちろん、二人のこの〈異人〉性は、抵抗と軋轢を生み出すことになるが、それは課題と改革の方向性を明確にする過程でもあった。

3年の紆余曲折をへて辿りついたのは、授業の公開と子どもの学びに寄り添った授業研究会の創出である。

授業公開は教室に他者のまなざしを入れ、研究会ではさまざまに異なる声が響きあい、教室と職員室を交響／公共圏へと確実に変容させてきた。

学校は、外の圧力だけでも、内側の動きだけでも変わらない。内と外の往還こそが、教師をたがいに異化する学び手へ変貌させ、学校改革を駆動させていく。そして、〈異人〉たちの交響／公共性こそが教室に〈学び〉を再生させ、学校改革の道筋を明らかにしていくのである。

新座高校の4年間の軌跡は、その事実を如実に物語るだろう。

2. 福井ラウンドテーブル2011に参加して

スクールリーダー養成コース2年／大野市有終西小学校 川端 英郁

昨年度の6月のラウンドテーブルと同じように、たくさんの方が参加して行われた今回の学校改革実践研究「福井ラウンドテーブル2011」は、私にとって特別なラウンドテーブルだった。福井大学教職大学院に入学して2年。この2年間の実践を長期実践報告としてなんとかまとめ、その最終報告をこのラウンドテーブルで行うことになっていたからだ。さらに、その長期実践報告が冊子となって配布され、それを使って最終報告を行うということも、特別なラウンドテーブルだと感じる要因になっていたと思う。

さて、「福井ラウンドテーブル2011」だが、今回も運営される福井大学教職大学院の先生方のたくさんの思いや工夫があふれるものだった。例えば、参加人数がとても多かったり学校教育以外の分野の方も参加されていたりしているという

ことだ。しかも、県内にとどまらず県外からの参加者もとても多かった。これは、平日頃から先生方が広くアンテナを張って情報を集めたり発信したりするからできることで、フッ



トワークの軽さやアクションの多さをうかがい知ることができた。1 日目のセッションⅢのテーマ別の話し合いで「学校拠点の実践研究の持続的な発展」の1 会場を運営をさせていただいたが、このときに発表されたのが、岐阜県恵那市立長島小学校と栃木県鹿沼市立みなみ小学校の先生方だった。お二人ともパワーポイントや印刷物を使つての発表だったが、その資料の準備や連絡調整を当然ながら教職大学院側で行っているだろうし、それが、いくつもの会場での準備となるとそれはそれは大変な労力だろうと想像できる。その点から考えても、このラウンドテーブルを参加者にとってよいものにしたという、先生方の思いが伝わってくる。

また、セッションがいくつも用意されていた。これは、参加者が自分と同じ分野の方の話を聞いたりそれについて語ったりすることで、自分の分野をさらに伸ばし深めていくヒントをもらえる。しかも、他分野の実践に触れることで、自分の実践を振り返ることができ、自分の実践を深めることにも役に立つ。2 日目のセッション V「協働探求 展開を語る／プロセスを聞き取る」では、公民館主事の実践や千葉県松戸市立小金中学校の理科担当の先生から実践を聞くことができた。特に小金中学校の実践は、BDF（バイオ・ディーゼル・フューエル：注）に関する探求的学習の実践だったが、企業と連携したり、地域に向いての活動であったりと、本校が行っている地域と連携した活動とよく似ていたので、実践を聞き、語っていても本当に自分たちの実践に活かせるアイデアが多かった。特に、各種事業に申請し補助金を得て実践に利用していたり、地域の企業に依頼して協力を得たりなど、本校で行っている連携以外の実践が目新しかった。このように、今回のラウンドテーブルに参加しなければ知ることができなかったものに触れることができたのも、先生方の日頃のフットワークの軽さやアクションの多さができる技なのではないだろうか。

ところで、自分の実践報告だが、2 日目に行った。1 時間40 分という長い時間をいただいたにもかかわらず、時間が少し足りなくなってしまった。わかっていたことだが、それだけ長期実践報告については、詳しく聞いてもらいたいという思いが強かった。勤務しながら教職大学院に在籍していた 2

年間の思いは、一言では語り尽くせない。つたない 2 年間の実践だったが、学校の仲間と一緒に作り上げてきたものは、たくさん聞いてもらいたいものだ。語るだけでなく、他分野の方の話を聞くことで、これからの実践のヒントにできたらと思っているので、ついつい時間を使ってしまう。ただ、意味なく時間を使ったのではなく、充実した時間を同じテーブルの皆さんと共有できたことも、意味深く、自分にとってはこれからの教員人生に生きる充実した時間だった。

このように様々な実践に出会い、語ることができ、さらにたくさんの知のお土産をもらえるラウンドテーブルだからこそ、魅力があり参加者も多いのだと思う。私は今年度で教職大学院を卒業することになるが、卒業後もこのラウンドテーブルになんらかの関わりをもちながら参加し、自分の知をそして実践力を高めることができたらと考えている。教職大学院で学んで良かったと思えるその一つが、このラウンドテーブルなのだ。

このように教職大学院で学んだことで、ラウンドテーブルに出会い、自分の知をそして意識を高めることができた。ただ、今回東北地方や関東の一部で起こった東北関東大震災で被災され、今も不安な中で生活されている方々のことを考えると、このような学びができ、大好きな学校や子どもたちと日々の生活を何不自由なく送ることができる幸せに感謝しなければならぬと強く思う。そして、一つ一つの命がどれだけ大切かということを改めて実感することができた。被災された方々のこれからの健康と少しでも早い復興を祈りながら、学校現場で自分に今何ができるかということを実際に考えながら、今後も必死に頑張っていきたい。

注：菜種油・ひまわり油など生物由来の油やてんぷら油などから作られるディーゼルエンジン用燃料の総称。燃えて CO₂ を排出しても、CO₂ とカウントされない。（京都 議定書では、植物由来の CO₂ 排出は、排出量としてカウントされないことになっている。）バイオディーゼルは、CO₂ 削減の手段として注目されている。また、硫黄酸化物（SO_x）がほとんど出ないという利点もある。（環境 goo の HP を参考）

教職専門性開発専攻コース2年 小出 哲也

教職大学院に入学して早2年がたち、2月27日のラウンドテーブルで2年間の実践を報告した。昨年度は、主に聞く立場だったが、今年度は発表ということで上手く話せるか不安があった。ラウンドテーブルの良い点は、異なる学校種、異なる教科の方の実践報告が聞け、討議できることである。同じ学校種や同じ教科で話した方が良いとの意見もあるかもしれない。その考えも正しい。ただ、異なる人に実践を伝えることで再度自分の実践を振り返ることができるし、異なる立場の実践を聞くことにより自分の実践に新たに活かすこともできる。それだけ、視点が広がるのではないだろうか。それが、福井県内だけでなく福井県外の方の報告も聞ける。このような場合は福井大学のラウンドテーブル以外なかなか存在しないと思う。まず私の報告の内容を振り返りたい。

2年前、家庭で深刻な問題のある児童との関わりから、どのような児童にも学びたい、知りたいという思いはあるということを肌で感じた。そのような経験からどのような児童・生徒に対しても、学習することが楽しいと思えるような授業力をつけたい、教室を楽しい学びの空間にしたいという思いから教職大学院を志望した。そして、2年間の長期実践報告書のタイトルを「子どもが楽しく学べる授業づくりをめざして」にした理由としては、どんなやり方にせよ児童が学習するのならば、子どもが楽しんで授業を受けられるのが最善だと考えていたからだ。子どもが「学ぶことって楽しい。もっとやりたい、知りたい。」と思うことを大事にしたいと私は考えている。そのために、授業者はどのような授業づくりが必要か、2年間参観して気づいたことや、実際に授業を実践して感じたことを報告した。

失敗し試行錯誤することでしか、授業力は伸びないということを教えて頂き、途中からインターンシップは過去の経験や新しく学んだことを自分なりにアレンジして実践する場であることを感じた。失敗を恐れずどんどんと挑戦しなければもったいないと感じるようになった。インターンシップ1年目での前半でのこと。4年生のクラスで実習を経験したが、ここで印象に残っていることは児童一人ひとりが自分のクラスに対して行う役割は何か、それぞれに考えをもっていることであった。つまり、決して人まかせにはしていないことである。他人の意見に耳を傾け、自分の意見をしっかりとつ。グループで協力したり、注意しあったりする関係性を大事に

する。個人の問題はクラス全体の問題として考える。とにかく、クラスの和やつながりがあるクラスだった。授業を参観させてもらったが、児童にとって身近なことを導入で設定していた。そして必ず児童を迷わせる課題を設定していた。この迷いというものを授業の中で大事にしていかなければならないと感じた。求める答えは一つかもしれないが、そこにたどりつくまでの方法は何通りもある。それを、みんなで考えたり意見を戦わせたりすることによって、判断力が高まったり、コミュニケーション力も培えたりすると思う。インターンシップ2年目でのこと。ここでは、グループ学習の支援の仕方を学んだ。机間支援の方法について悩んでいたが、ようやくどのように支援したらよいか自分なりの方法を見つけることができた。まず、グループでの活動が活性化しているのか停滞しているのかを見極める必要がある。そして停滞しているグループにはどこまでできているか説明させ、どこで悩んでいるか言葉にさせることが大切である。その意見を聞いた上で助言をすること。そうすることによってグループ学習が活性化していく。子どもが意欲的に学習に取り組むことができると感じた。

ある大学の教職大学院の先生は、学生が1年から2年間インターンをするのは画期的だとおっしゃってくれた。また、現職の先生方も研究テーマが分かれていて総体的に学ぶことはできないと聞き、自分たちはめぐまれた環境の中で実習できたことを感じた。しかし、私の発表を、グループの方々共感的に聞いてくれる一方で厳しい意見も出た。去年卒業された先輩からは、まだまだ自分の視点と向き合っていないと厳しく指摘された。人から言われたことを納得していないのに自分の言葉にしているとのこと。まだまだ課題だらけである。指摘された部分を今後、克服できるようにしていきたい。ラウンドテーブルで実践を報告することによって、今までやってきたことを改めて振り返ることができた。報告をしながら、自分の中であの時はこうすればよかったのではないかとその場で再構成している自分がいた。

他の先生の話を通して感じたのは、常に現場にはさまざまな問題が横たわっているということだ。どの先生もそれを解決し良い方向にもっていこうと必死である。その解決策として元至民中学校校長の山下先生が、「前例踏襲は良くない。やれるところを少しずつやっていく。変えられるところを少し

ずつ変えていく。とりあえずやってみようと思いをあげることが大事。」という話をされた。今後自分がそのような場面に出会ったらどうしたらよいか考えさせられる。このラウンドテーブルでは、環境は違えど自分の学校や実践と照らし合わせながら話が聞けるのである。また、学校全体で協働して取り組んでいくことが大事だということも感じた。そういう意味からも、他の先生の実践を真っ向から否定するような環境ではなく、気軽に相談できる環境こそが望ましいということを経験から実感した。

正直、今まで、教職大学院で取り組んできた合同カンファ

レンスやラウンドテーブルは本当の意味でその意義を見い出せずにいた。ただ、2年間を終える今、今回のラウンドテーブルにおいて長期実践を報告にするにあたって、学校種、教科を超えて報告を聞きあうことの意義をようやく理解できたように思う。環境は違うけれど、思いはみんな同じである。「良い授業をしたい。良い学校にしたい。でもどうしたらよいか分からない。」だから、悩みながら試行錯誤すると思う。いろいろな実践を聞いて、参考にしたい。そして自分の悩みを共有したい。今回のラウンドテーブルを通して、実践・省察（振り返り）・語りの重要性が腑に落ちた。

スクールリーダー養成コース1年／坂井市立丸岡南中学校 渡邊 朋重

今回は、自分の実践だけでなく、丸岡南中学校の実践発表も行うということで、緊張した気持ちで臨むこととなりました。また、報告の最後がまとめきれないことで、やや重い気持ちでの参加となりました。心残りではありますが、報告をまとめたことで、学校、そして自分自身の実践を改めて捉え直す機会を頂けたことは大変有意義だったと思います。ポスターセッションも初めて体験できたし、発表をやり遂げた充実感も大きく、やってよかったと素直に思っています。

1日目のペアだった栃木南中学校の発表は、研究主任江田先生の「生徒を変えたい!」「学校(先生)を変えたい!」という熱意にあふれていました。授業参観をもとにした教科を越えた協働体制という、本校と似た取り組みで学べるのが多かったのですが、何よりも江田先生の熱意が印象的でした。教科を越えた協働研究に取り組むようになったのは、江田先生がご主人に言った「教科を越えて授業を見合う授業研究をしてみたい」という一言がきっかけだったらしく、ご主人が聞いたことがあるということで、宇都宮大学の先生につながり、早速講演に来てもらったのだそうです。最初は反対する教員も多かったそうですが、やがて栃木市教委のバックアップを得て軌道に乗っていったということでした。真っ向からぶつかる先生や、あまり乗り気でない先生方を、江田先生が強い信念を持ち引っ張ってこられたのです。言葉では伝わらないご苦労、並大抵の事ではなかったことと思います。授業公開のために、全校自習にする際、「先生方もよい授業づくりのために頑張るから協力してほしい」と生徒に呼びかけたり、授業評価で生徒に威圧感を与える教員に強く対峙したりする

など、生徒と共に作りあげてを大切に取組んでこられていました。

2日目はラウンドテーブル、こちらは、教職大学院でのカンファレンスで慣れている、少人数でのセッションということで、いろんなことを語れることを楽しみに参加することができました。美方高校滝先生の報告は、経験のない高等学校に転任になり、授業研究会が無い事など、戸惑いながらもプロジェクトチームを立ち上げ、学校改革に挑戦するという内容でした。教科を越えた協働によって授業公開・授業研究会を行っていく。教師の同僚性、協働を大切にするために教科の枠を越えた研究体制を作っていくという、まさに自分が目指している実践でした。滝先生も、積極的に同僚との協働研究を働きかけたり、教職大学院で得た事を職員会議で報告し啓発を図ったりと、様々な努力をこつこつと積み上げられてきていました。提案が幾たび覆されてもあきらめない粘り強い取り組み、滝先生も信念を持ち、熱い思いで取り組んでおられました。

さらに、信州大学松本中学校の河西先生の実践には度肝を抜かされました。半年にも及ぶ長い実践にも驚きましたが、それ以上に授業実践が一人の生徒の学びの軌跡を丹念に記録し、徹底して分析されていたことに驚かされました。全授業記録から生徒の学びの瞬間瞬間を捉え、学びの過程をきちんと押さえることで授業を振り返っていました。ここまで時間と労力を惜しまず徹底した省察を行っておられることに感服しました。協議でも、その生徒の選定の仕方や、詳細な記録の仕方等、質問が相次ぎました。授業記録のVTRは1台で1

人を追っている、あまり運動能力が高くない生徒を選んでいるとのことでした。また、一人の生徒に注目しすぎ、個人の学びになってしまうのではないかと、はたしてそれが授業全体のことにあてはまるのかという反論もあるだろう、そのためにも、どういう意図を持ってその生徒を選んだか、一人の学びに寄り添うことで授業を振り返る意図、意義もきちんと押さえなければならないという指摘がありました。しかし、これだけ丹念に学びを追っているのに、どの個に注目した場合でも、学びの場面を捉えることは可能で、同じ省察が得ら

れるだろうという意見も出されました。生徒の学びに寄り添うとは、まさにこういう授業記録、授業省察をいうのだと思いました。

今回のラウンドテーブルでは、報告をまとめることでの自分への問い直し・学校の実践の捉え返し、他者他校の報告に傾聴することでの自分自身への問い直しができたと思います。また、情熱を持って実践に向かっておられる熱い方ばかりで、刺激を受けると同時に、勇気ももらえた2日間だったように思います。どうもありがとうございました。



私は、昨年の6月に初めてラウンドテーブルに参加させていただきました。その時は先生方の発表をただただ「すごいな。」とばかり思いながら聞いていたことを今でも覚えています。それが今回2月27日に開かれたラウンドテーブルでは、私自身が発表するというのに気づき緊張と喜びを感じました。経験豊富な素晴らしい方々の中で私の発表をする緊張と、その中で自分の学びができる貴重な機会に恵まれたことへの喜びを抱えながら当日を迎えました。

私は、中学校の国語の先生、他県の教育委員会の方、大学の先生、特別支援教育センターの方々というグループに参加させていただきました。自己紹介で中学校の国語の先生がとても話をしやすい雰囲気をつくってください、私も「話を聞いていただける。」という感覚を受けました。まずは、中学校の先生が発表をされました。授業実践を読む中で常に「この授業で先生が教えたい意図的な学びと、子どもの学びの筋の両面を理解したい。」と思いながら聴きました。そこには、先生が子どもの反応を受け入れながら授業の計画を悩みながら模索して進められていく様子が描かれていました。学ばせた

教職専門性開発コース1年 内山 里香

い大筋からずれることなく、子どもの発見や疑問、発案を取り入れながら変化していく授業に引き込まれていました。そこで、自分の実践と照らし合わせながら聞いていた私は「学びの必然性は、生徒だけでなく教師にも求められている。」と強く感じました。学びの必然性を生み出す授業づくりのためには、教師も学び続けなければならないのだと改めて感じた瞬間でした。次に、私が発表をさせていただきました。最初から「発表をすることで私の気付いていないことや、どうしていくともっといいのかを教えてください。」と思って発表に臨みました。私の講師経験での学びに、じっくりと耳を傾けていただけることにとても感動しました。すると、実践報告に書いたこと以上に熱く語っている自分がいました。発表後にいただいた質問に答えながら「私の求める楽しい授業とは、学びの必然を子どもが感じることでできる授業なのかもしれない。」ということに気付かされていきました。また、私の学びで何気なく書いた言葉に皆さんがラインを引いて「この気づきがいいね」「ここでの学びがこの実践に繋がっているね。」と言ってくれることが素直に嬉しく「もっと私

自身学びたい。」と思えました。

全ての発表を終えた後、子どもの学びを文脈的に読み取ることについて話し合いました。そこで、心に残ったことは「子どもの学びを文脈的に読み取る力」と「教師の専門性」この

両輪が必要であるということです。子どもへの返し方や問いかけ一つで授業が変わっていく、その専門性にももっと注目してバランスのとれた両輪を授業の中で展開していける力をつけていきたいと強く感じました。



3. 協働探究の展開を語る・プロセスを聞き取る

北海道大学大学院教育学院 教育行政学研究グループ博士後期課程
(日本学術振興会特別研究員) 伊藤 健治

私の参加した第1グループは、実に多様なメンバーが集まり、率直で活発な対話が展開された。報告者は、福井大学附属中学校の柳原有紀先生、福井大学教職大学院（修士1年）の林克磨さん、富山市立堀川小学校の松倉美華先生、聞き手は、進行役の福井大学の吉村治広先生、初日に協働学習による学校変革を報告された埼玉県立新座高校の金子奨先生、そこに教育行政学専攻の私が参加させて頂いた。

一人目は柳原先生で、随筆（向田邦子「字のないはがき」）を題材に、生徒達が対話を通して協働探求する授業実践が紹介された。作品の内容や生徒の様子、探求を促す教師の関わり方など、様々な視点から質問や意見が交わされた。じっくりと作品を味わいながら実践を検討する過程は、国語科ならではの魅力的なものであった。

二人目は、1年間のインターンシップを経験したばかりの

林さんである。報告からは、生徒たちとの関わり方に悩みながらも、少しずつ経験を積み重ねていく姿が伝わって、教職大学院での学びや深さを感じる事が出来た。

そして、三人目の松倉先生の報告は、「かたちあそび」をテーマにした小1算数の授業実践であった。言語化されにくい児童の形認識を、遊ぶ様子の中から丁寧に読み取っている実践であった。議論を通して、子ども達がいきいきと学ぶ姿が伝わり、実践研究の醍醐味が感じられた。

今回のように、異なる立場からじっくりと実践を語り合う機会は他では経験しがたく、非常に中身の濃いラウンドテーブルであった。今後のさらなる展開を期待したい。

3 チームの御報告から「神は細部に宿る」という言葉が浮かんできた。現場での一つ一つのやり取り。上手くゆくこと。上手くゆかないこと。共有し協働することで力を増してゆくこと。宮沢賢治の「億の巨匠」という人格の輝きがそれぞれの現場を前に進めていることを強く感じた。

(1)「チームで働くこと～登校することをやめたKさん」担任、副担任、特別支援教育コーディネーターと保護者が連携しあい反省しあいながら係わり続けることで、「直接の係わり手」と「他者」に係わる力を、試行錯誤の現場を丁寧にトレースすることで伝えてくださった。

(2)「教師間のコミュニティの活性化と学び合いのある授業

ラウンドテーブルへの参加は3回目となるが、「なぜ初めてお会いする方々とすぐに話し合いに入っていけるのか」いつも不思議に感じる。今回も、初対面の6名で同じテーブルを囲んだが、自己紹介の時から自然に緊張感は解け、報告の中から具体的な「人の姿」や「学び」が見えてきた。ここに集う人達が丁寧に時間をかけて実践を語り合い、学んでいく子ども達や大人達の姿から質的な研究を進めていこうという「省察姿勢」を共有しているからだろう。

報告者の1人が「校内での小グループでの話し合いが思うように進まない」と発言されていたが、私自身同じ事を考えていた。今回も10名程の教員に参加を勧めたが、結局1人での参加となってしまったのである。

自分なりの実践を持たずに、明日からすぐ使える「即効薬」を求めている人にとって、ラウンドテーブルでの話し合いは「他人事」と映るだろうが、「即効薬」は所詮他人の実践なのであって、環境も育ち方も違えば同じ成果を挙げることは難しい。「小グループでの質的話し合い」とボディーブローは後から効くのである。自らが実践し、質的研究の視点を持つこ

(有) 伊与代表 ISO審査員 伊与 喜久子

づくり」教職大学院2年間の現場での実践と振り返りの報告から報告者の苦闘と学校内の空気の暖かな変化を感じる報告であった。

(3)「学び合い・育ち合い・育まれた地域づくり」公民館主事という立場での36年の取り組みで、地域の人の力を活かす力強さと可能性を伝えてくださった。

この機会を得て、教職大学院という振り返りと推進の場としての価値を感じた。また、暗い時勢や東日本での大災害から無力感や閉塞感があるが、人には、福井には、日本には、まだまだ大きな力がある！という勇気が湧いた。多くの気づきを頂いたことに感謝します。

松戸市立小金中学校 高城 英子

とによって、他者の実践に自分の実践を重ね合わせて考えることができ、本質を掴むことができる。そんな話し合いからエネルギーをもらって今回も大満足の私ではあるが、この良さをどうしてわかってもらえないのかと考えていた。しかし、これは私自身が「即効薬」を求めている事なのかもしれないと反省した。今回360名以上の参加者があり、確実に福井大学からの発信が広がっているのである。私達の実践の積み重ねから「小グループでの質的話し合い」の良さを広げていくしかないであろう。

当日同席した新規採用教員の方が「今年1年たくさんの研修に参加したが、ふと大学時代に経験した今回のような研究会に参加したくなった」と語っておられた。自分が実践した時、省察してくれる場が欲しくなるものなのだろう。次回は、実践報告の中に省察の論点も明確にして発表してみようかと考え始めた気の早い私である。

参加したグループでは、各先生方の日頃の探究と悩みの交流、会を通しての発見の共有がなされました。

福井大学附属特別支援学校小学部において「遊び」を通じた子どもの経験と学びを探究されている加納先生は、1人の子どもに着目した時系列による詳細な記述をもとに、子どもの変化と同時にご自身の捉えの変化を語られました。事例の記述直後に解釈を添える報告スタイルは、続いて報告の川合先生にとって特に大きな発見であった様でした。

啓新高等学校の川合先生は、講義形式の授業観打破と校内授業研究会の在り方の模索という問題意識から、子どもに授業させた実践を報告されました。話し合いを通じ、講義形式の中でも生徒が専心する状態を作れる可能性が見出され、また授業報告の視点として子どもの姿をもっと見ることを加納先生の報告により気付き、取り入れたいと川合先生が強く語られていたのが印象的です。

東京大学大学院教育学研究科修士課程1年 山路 茜

高浜町立内浦中学校の草桶先生は、算数と数学の接続を課題にした関数関係と比例の授業を報告され、子どもから見る具体と抽象の壁について考えさせられました。興味深かったのが、スパイラル型教育課程の実現と、具体から抽象へ移る際の一方法と考える言語活動の実践のヒントが、川合先生の報告にあるのではという話題でした。1人学級で小中併設という勤務校の特質を最大限に生かし、中学生に小学校へ授業させに行くという取り組みの可能性が提案されました。

探究の視点が三者三様でありながら、それが語られる中で各先生の実践がつながり新たな視点が生まれるそのプロセスを目の当たりにすることができ、教師が実践を研究者と共にコミュニティの中で省察することの意義を実感し、初めての参加ながら大変有意義な時間を過ごすことができたと嬉しく思っております。ありがとうございました。



組織に埋め込まれた多様なコミュニティ

福井県教育研究所 副所長 加藤 正弘

本所（教育研究所）の役割が大きく変化したのは、全国学力学習状況調査において福井県がトップクラスの成績をおさめた平成 19 年度からではないかと思えます。本庁（福井県教育委員会）ではその頃から、いっそうの学力充実をめざして様々な事業や施策が企画立案され、その実施にあたって本所のメンバーが求められました。本所はもはや、本来の研修・調査・相談業務を課ごとに担っていくことだけでは成り立たなくなってきたのです。

しかし本所は、福井大学教職大学院の拠点校であったことが幸いしました。

1. 「協働研究会」を核に

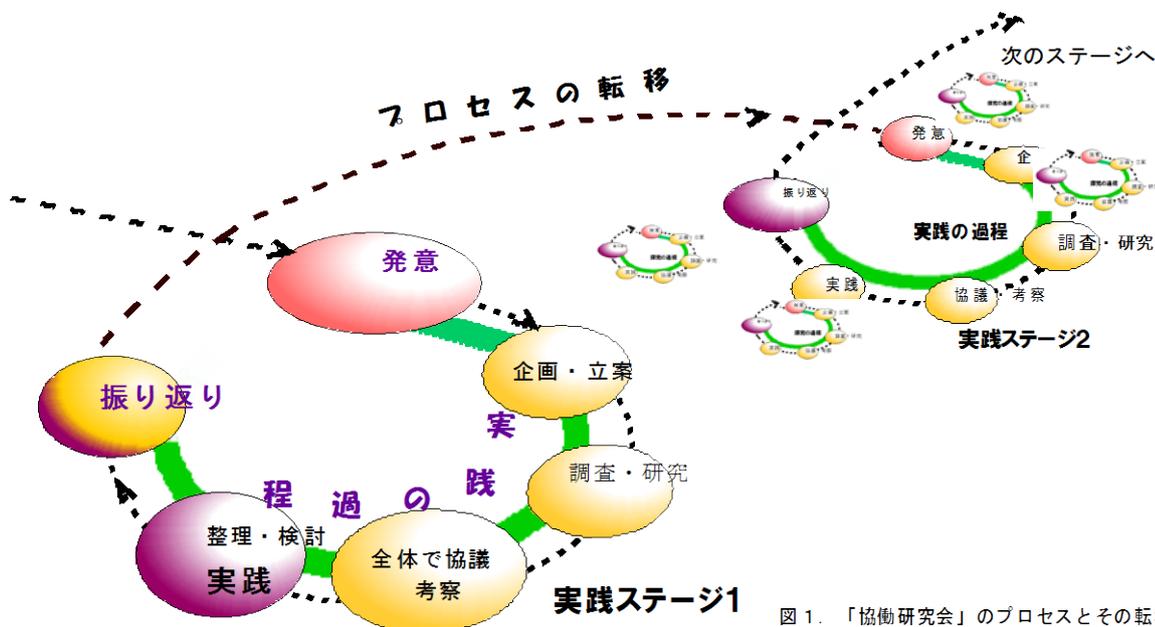


図 1. 「協働研究会」のプロセスとその転移

平成 20 年度から月 1 回のペースで始めた協働研究会では、全所員が集まり、グループ討議を核にして語り合い、それをもとに実践し、振り返るといった実践の過程を構築しました。マネジメントしたのは、本所の教職大学院生です。教職大学院の教授陣 2 名も協働研究会に加わりました。

図 1 の「実践ステージ 1」は、協働研究会を中心にしたコミュニティでつくられる活動のステージであると捉えるなら、その過程で培われた機能は、県学力調査の設計・実施にあたる「実践ステージ 2」にも転移して実践されると考えることができます。この県学力調査は、その総括担当者が中心になって進めますが、各教科グループにおいても同じような活動プロセスが仕組みられています。従前から、県学力調査は外注せずにすべてを内製化してきました。そこへ、平成 21 年度には、基本的な力を問う A 問題と活用力を問う B 問題に改編し、さらにその問題を Web 公開するという新たな取り組みが始まりました。このことは、我々にとっては極めて厳しい内容です。

当然、教科ごとの研究開発は不可欠であり、教科グループの強化なくしては、問題作成のスピードも深さもままなりません。そこで課を越えた教科グループをつくり、定期的な所内ゼミを開いて深め合ったり、テストシステム先進地にグループで訪問し、情報交換をした上で議論したりして、研究開発のペースを一気に上げていきました。さらに、問題完成後

は実際の学力調査を経て、教科グループでは結果データを検討し、報告書作成にまで至ります。

副所長や課長の管理者グループとしても、① “福井型A問題、B問題”などという名称はやめよう、②PISAでもTIMSSでもない、全国学力学習状況調査とも異なる、新しい調査システムにし、SASA2011 (Student Academic Skills Assessment) と名付けて差別化をはかろう、と考えました。これも、「実践ステージ 2」に連関する重要なコミュニティです。つまり、「実践ステージ 2」には、関係者による数々の実践コミュニティが内包されており、それらが相互に関連付けられているというわけです。

SASA2011 の他に、「実践ステージ 2」に相当する業務は、他に全国教育研究所連盟共同研究集会福井大会の企画・実施であったり、本所をあげて「訪問研修ユニット」の開発を行ったりしたことなどが挙げられます。

2. パフォーマンスの向上

本所のような出先機関と、本庁との大きな違いは、施策立案、予算獲得、議会対応の有無です。本所は、本庁のような行政テクニックを駆使しながら決まった厳しい業務をこなしていくという状況にはない分、創造的で開発的な仕事を進めていく役割があります。しかし、学力充実に関する様々な施策や事業が立ち上がってくると、本庁との共同作業が増えます。パフォーマンスを上げるとともに、職員が病気になるように業務スケジュールを管理しなくてはなりません。そのためには、課ごとに、あるいは課を越えたコミュニティレベルで問題点や課題を即時共有し、知恵をしぼりながら解決に向けたプロセスを構築することが重要です。

教科研修課の場合、これまでは教科ごとに研究室が分かれていました。研究中心の業務ならこの形態でもよいのですが、スピードと同時に深さも求められる業務の場合には、対応できません。避けて通れない業務を所員一人一人に個別に納得させる時間的なゆとりもありません。そこで、教育研究所のある研修室を教科研修課の執務室に変え、そこにスタッフを集め、課長の業務管理の下で効率と効果が追究できる環境にしました。つまり、新たなコミュニティを物理的に創出し、パフォーマンスの拡大をはかったのです。SASA2011 の完成はこのような環境から生み出されました。

このように、協働研究会の機能が関係者で構成される様々な業務場面に生かされた結果、所員のマインドは向上し、業務成果も向上したのです。

全国の教員研修センターの中には本庁とは一線を画した独自性を強めているところがあり、そのことが一種の“ガラパゴス化”を遂げて本庁との連携が整わないところがあると聞きます。しかし、本所は、本庁施策の支援機関としての性格を強めつつも、前述の様々な取り組みによって、自主性、創造性が機能する機関となってきています。本所は本庁とともに歩む協同体を構成し、本庁との相乗効果を生み出す組織の力を培ってきたように思います。原動力になっているのは、組織の中に埋め込まれた様々なコミュニティが相互に連関し合い、作用し合っている実践があるからだと考えています。

平成 22 年度第 2 回運営協議会開催される

平成 22 年 3 月 18 日（金）に、平成 22 年度第 2 回運営協議会が開催されました。梅澤章男・教育学研究科長のあいさつ、松田通彦・福井県教育庁企画幹のあいさつに続いて、全体協議およびグループ別協議を持ちました。

全体研究会では

- ① 平成 22 年度年間報告および平成 23 年度年間計画（案）について
- ② 平成 23 年度学生募集状況について
- ③ 教職専門性開発コース修了者の就職状況
- ④ 平成 23 年度免許更新講習スケジュールについて

協議され、いずれも原案どおりに承認されました。

その後のグループ別協議では、拠点校・連携校・県教育委員会・市町教育委員会の 5 グループに分かれて、今年度の状況報告や次年度への要望等の活発な情報交換・意見交換が行われました。その中からいくつかをご紹介します。

<拠点校・連携校>

- ・定期的にかかれる校内研修会に教職大学院のスタッフの方々にも参加していただき、良い刺激をもらっている。全てについて十分理解してからスタートするのではなく、やりながらつかんでいくという感覚がよい。
- ・初めての院生受け入れは戸惑いもあったが、活動を進めていく中で学校にとっていい影響が生まれてきた。インターンには、基本的に自分で何ができるかを確かむことを期待している。
- ・学校の教員の誰かが教職大学院で学びながら学校を動かす核として機能することが重要であるとの雰囲気は出てきたが、経済的な事情もあり、継続して院生を出すことが難しい。
- ・拠点校については、このまま拠点校で有り続けるべきかどうか、場合によっては再検討の余地もある。
- ・家庭と学校との両立もあって、女性教員の院生が少ないし、勧めづらい。
- ・各学校の課題や状況に応じて教職大学院の先生方に入っただき、教科研究や学校改革について助言をもらい、それを日々の教育活動に反映させている。院生として、校内の教員には今後も直接的間接的に、自然な形で教職大学院での学びを還元していきたい。
- ・講師の場合、教職大学院生として全てに参加できないときもあるが、本人の学びへの意欲が高く、学校の様々な活



動にも積極的にかかわっていた。

- ・多くの課題を抱えている学校現場では、完全な状態で学校改革ができることはあり得ない。とっかかりの一步をどう創るか、半信半疑の人たちをどうその気にさせるかが重要。実践報告を全職員に紹介したり院生としての学びを伝えたりして管理職も他の教員に理解を広める必要がある。
- ・現場の先生の中には、教職大学院に行きたい気持ちはあるが、間違った情報や疑問を持っている場合がある。もっと、教職大学院の目指す方向を正しく広める必要がある。
- ・どの学校も長期的展望が求められている。求めて学ぶ姿勢が重要。足りないところは専門性のある人たちで知恵を出し合い創っていく。
- ・学んだ人が学校の中で影響を及ぼすには、もう少し若い年齢の対象者の方がいいのではないか。

<教育委員会>

- ・県で試行している教職員評価システムの課題は、スキル面だけではなく、本人の意欲づけに向けたファシリテーターとして関わる力を培うこと。管理職の研修が不可欠。
- ・院生の募集の時期も相互の連絡のもと、スムーズに進めている。
- ・高校を指導主事訪問したが、これまでになく活発な授業研究会で先生方が力を付けていると感じた。
- ・県ではコアティーチャー養成事業を始めた。ここでは教職大学院の発想と同じで、各学校の課題に寄り添うべく指導主事が出向く OJT のスタイルを取り入れている。
- ・県教育研究所では、次年度から新任教頭研修 5 日間のうちの 2 日間をファシリテーター研修として免許更新講習にファシリテーター役として参加する計画を進めている。教職大学院との新たな連携も始まった。（津田由起枝）

退任のご挨拶

この度、教職大学院のスタッフの3名の先生方がご退任されることになりました。院生の皆さんをはじめ、他のスタッフにも大変多くのご教示をいただき、心から感謝申し上げます。中村保和先生、篠原岳司先生、北野範子先生、益々のご活躍をお祈りしております。お3人からそれぞれ退任のご挨拶が届きましたのでご紹介します。

粹実至実を問うて書き、問うて読む

発達科学講座／教職大学院協働研究員 中村 保和

「文ハ糟粕瓦礫ナリ、是レヲ受クレバ粹実至実ヲ失フ」¹という言葉があります。失うべき実が初めからなければ論外ですが、文が糟粕瓦礫であるなら、書いて失われ、読んで受け得ない粹実至実は何かという問いが生まれます。

私は、2007年10月に福井大学教育地域科学部発達科学講座に着任し、それ以降、教職大学院の取り組みに参加させて頂くこととなりました。それまで私が身を置いていたのは、伝統的な学術研究の方法と体裁とを重視する環境で、そうした中で、自身の実践研究を伝統的な方法論の中に位置づけつつ、新たな研究の方向へと歩んでいくためにどのようなことをしていけばいいのかに悩んでいました。そうした私にとって、福井大学教職大学院の取り組みは非常に刺激的で、実践研究の新たな展望を予感させてくれるものでした。

合同カンファレンスやラウンドテーブルで様々な実践を読み聞く中で、私自身の「聞き手」としての構えとか態度というか、そういったものを自身の中にどう構築するかによって、自分自身が「書き手」となり「語り手」となる際の構えが自ずと決まってくるように思いました。

糟粕瓦礫たる文が、どのような方法論的根拠あるいは体裁を持たねばならないかを考えるより、実践研究論文とは、

書き記すに足る粹実至実は果たして何かと問うて書き、問うて読むべきであろうと思います。係わり手(実践者)の書いた文が、伝統的な研究という視点からは、論文として十分であろうとなかろうと、書き手であるその人が経験し知り得たことを、価値あるものと考えて書き記そうと努力することそのことに、価値を置くべきなのだと考えるようになりました。

実践研究において、「書くこと」「語ること」は、それ自体が目的となることはありません。私たちは、これら2つの仕事を通して、子どもが真剣に考える表情や、または、わからなかったことがわかるようになってニコッと微笑む子どもの表情を実現しようとしています。「書くこと」「語ること」を子どもとの係わり合いをよりよくしていくための手段と位置付けたとき、私たちは、書いて失われるかもしれない、読んで受け得ないかもしれない粹実至実に目を向けることができるようになるのだと思います。そして、そのことが、係わり手としての真の成長なのだと思います。

4月から群馬大学教育学部障害児教育講座に移ります。3年半の短い間でしたが、大変お世話になりました。またいつか、粹実至実は何であるかを問い合える場でお会いできる日を楽しみにしております。

註¹ 司馬遼太郎(1994)空海の風景(下). 中公文庫.

梅津八三(1976)心理学的行動図. 重複障害教育研究所研究紀要創刊号.

この1年間の感謝をこめて

機関研究員として福井大学教職大学院で過ごしたこの12か月、同僚のスタッフたちと、そして教職大学院の院生みなさんと共に、言葉に言い尽くせないほどの充実した日々を過ごしてまいりました。ここに1年間を簡単に振り返り、お世話になった皆様への感謝の気持ちに替えさせていただきます。

思い起こせば、私の福井での充実した日々は、まだアメリカにいたおよそ1年前、北大の出身研究室からの一本の電子メールから始まったのです。「福井大学の教職大学院から、4月から研究員として働かないかと誘いがきている。どうする？ 行くかい？」、それはあまりに突然のオファーでした。しかし、私は北大の恩師にすぐに国際電話し即答しました。「行きます」と。

不思議なことですが、この時の私には迷いが全然ありませんでした。福井県のことも福井大学教職大学院のこともよく知らないのに、「きっと現場の先生たちと沢山出会えて、絶対に自分の勉強になるだろうなあ」と楽観的に4月以降の仕事を思い浮かべていたのです。

帰国後の3月中旬、私は部屋探しも兼ねて初めて福井を訪れました。そして、その時に初めて気がついたのです。福井大学教職大学院が掲げる学校拠点での協働実践研究の理念と、北大時代からの自らの問題関心がきれいに繋がっていたことに。学校改善の支えになる教育行政、学校改善の実践を支える組織づくりと教員のリーダーシップ、これらに強い関心を持っていた自分にとって、福井大学教職大学院はまさに願ってもない職場だったのです。

しかしながら、仕事してみると当然ながら悩みもありました。まずは授業研究、教育行政学が専門の私には未経験の実践、授業の何をどのように見ればいいのか、全くのゼロからのスタートでした。次にカンファレンスの場面、グループのメンバーに学びをもたらすには、いかに話を聴き、何をどのように返せばいいか、常に試行錯誤の日々でした。

教職大学院研究機関研究員 篠原 岳司

そんなわけですから、最大の悩みは院生の皆さんや大学事務の方々まで「先生」と呼ばれることでした。「新任教員だって子どもたちの前では同じ先生である」とストレートマスターの皆さんに言う側の私が、大学の新任教員としてまさに同じ壁にぶち当たっていたわけです。思い起こすと笑ってしまうような話ですね。

これらの悩みは今も決して解消しているわけではありません。ただし、福井大学教職大学院では、同僚の皆さんとの温かく刺激的な議論と、院生の皆さんとの協働実践研究の体制が日々私を取り巻いていました。それらは互いを支え合い高め合う関係を私にもたらし、私自身の成長の大きな土台となっていきました。こういう表現が適切かはわかりませんが、この1年で当初の悩みはどうでもよくなり、困難に感じていたことは面白いことになっていたのでした。

この度、突然ではありますが、退任のご挨拶をさせていただかなければなりません。4月より彦根にある滋賀県立大学に専任教員として勤めることとなります。約1年前に運命ともいえる貴重なお誘いをいただき、福井の皆さんは私を大いに鍛え、そして育ててくださいました。新たな土地でもこのご恩を胸に抱き、より精進を重ねていきたいと思います。

それにしても、突然お別れを切り出して勝手なのですが、なぜかお別れという気がしません。彦根と福井は車で1時間半の距離。広い北海道に慣れている私には、お隣に醤油を借りに行くのと同じ感覚です。

また近々お会いしましょう。

この1年に思う

教職大学院客員教授 北野 範子

3月23日、26名の院生が学位を授与され巣立っていった。この2年間随分と自分を鍛えたことだろう。

昨年2月、ラウンドテーブルに参加した際、前任校で一緒だった講師で教職専門性開発コースの院生に出会った。2年間の『長期実践報告』（以下報告と記す）を聴きその変わり様に感銘を受けた。そして、彼はどうしてここまで変わったのだろう、そこが知りたくて報告を繰り返し読んだ。読むごとに綴られた言葉が深まりをみせる。

その終章に、「(特別支援ゼミなどで) 実践が、無残にもぼろぼろになって返ってきた、と思ったこともあったが、そういうときこそ、自分以外の視点による省察の機会を得て、実践の筋がより進化していったものだ。実に貴重な機会であった」とある。

この2年間、彼は必死で自分を見つめ直し、子どもへの認識を深め子どもを見る目を磨いていったことが分かる。

また、この2月には、高等学校に勤務するスクールリーダー養成コースのある院生の報告を読んだ。筆者は明るく行動的な方で語る言葉は熱い。

一般的には研究部がなく教科の専門性が高い高等学校において、教科の枠を超えて教員全員が授業を参観し授業研究会を開催することなど、簡単なことではない。しかし、彼女は、それを推進することの価値を模索していた。教職大学院での合同カンファレンスや夏期集中講座等でもその問いを投げかける。そして、教科の壁を乗り越えるとい

うことの意味、また、そのための示唆的な手立てに出会い、挑戦し成し遂げていくのである。

管理職の方の後押しや同僚の学び合おうとする姿勢、そして教職大学院関係者から定期的な訪問も受け、協働によるその実現を学校文化として根付かせたいと願うようになる。核としたコミュニティの輪がだんだん広がっていく様子も実感できて迫力あるものとなっている。教員生活の中で、これほど充実していた2年間はなかったようで、「達成感がある！でもこれからどうできるかが問題」と語る。

福井大学教職大学院は、学校改革を牽引するものとして今注目されている。学校教育を担う教員の専門的力量的の向上と協働研究という点から見て、これほどまでに力強い方法が他にあるだろうか。この教職大学院の存在する意義の大きさに改めて思いを深くできたことは、私の1年間の収穫であった。

教員として教職大学院修了は一つの通過点。培ってきた力は、時とともに形を変え信念となっていくかもしれない。今後の教員生活の中で真価を発揮させてほしい。

さて私は、今年度末をもって退任することといたしました。院生たちが修了に向け、報告として成果をまとめラウンドテーブルで力強いメッセージを発信している姿は、心に迫るものがありました。多くの学びを得て、任を終えられることに感謝しています。ありがとうございました。

日本臨床教育学会設立総会に参加して

教職大学院 森 透

さる3月19日(土)13時から兵庫県西宮の武庫川女子大学で学会の設立総会が開かれました。東北関東大地震の影響で中止にすべきかどうかを事務局は悩んだそうですが、臨床的な視点で地震の災害や被害についても学会として取り組んでいこうということで開催することにしたとの説明がありました。参加者は地震の被害のあった地域からは参加が難しかったのですが、100名を超える様々な職種の方々为全国から集いました。大会ははじめに被災者の方々への黙祷から始まりました。そして、第1部「臨床教育学の到達点と学会の役割」、第2部が設立総会、第3部が記念レセプションでした。第1部は設立準備会から「日本における臨床教育学のこれまで、これから」(田中孝彦準備会代表)、トークセッションでは「それぞれの地域・専門分野から臨床教育学を語る—新しい学会への期待と注文—」で、本学の寺岡英男先生も「教職大学院の立場から」発言されました。そのほかに発言された方々は教師、児童相談所、小児看護、カウンセラー、研究者等々でした。全体討論でも次々と発言する方が続き、熱いものを感じま

した。第2部の設立総会では会長(田中孝彦氏)と理事10名、監査と事務局を選びました。趣意書は6つの柱でできており、①日本の社会と子どもの生存・発達の「危機」のなかで、②子ども理解を深め、子どもを支える新しい共同関係を探る、③発達援助専門職・教育職の専門性を問い直す、④臨床教育学の構想と臨床という言葉の意味、⑤研究の方法と概念の学際的な検討の必要性、⑥日本臨床教育学会の設立を、という6点です。当日入会された方も含めて200名近い学会となりました。第3部のレセプションは地震に配慮して静かに行なわれました。

私は初めて武庫川女子大に行きましたが、本学会は様々な分野の方々の集う学会としては非常にユニークで今後の運営が期待されると思います。研究者中心の学会ではなく、研究者も実践家も、様々な、ある意味専門職の方々が集まり、それぞれの視点で「臨床」を語る学会ということでしょうか。今年の10月1-2日(土・日)が北海道教育大学札幌分校で第1回大会が予定されています。関心のある方は是非ともご参加ください。

2010年度 長期実践研究報告の目録

教育観を培う実践と思考のプロセス

共に学び合えるかわりを目指して

子どもが楽しく学べる授業づくりをめざして

学ぶことが楽しい理科の授業への挑戦

一人一人の子どもの学びと成長を支える授業(支援)とは

『子どもの学び』を追究する

教師間のコミュニティの活性化と「学び合い」のある授業づくり

特別支援教育を支える特別支援教育センター

岸本 千佳 学校改革実践研究報告 89

北島 亜実 学校改革実践研究報告 89

小出 哲也 学校改革実践研究報告 91

中山 侑子 学校改革実践研究報告 92

和中 律英 学校改革実践研究報告 93

赤澤 達郎 学校改革実践研究報告 94

内田 達男 学校改革実践研究報告 95

大崎 忠久 学校改革実践研究報告 96

授業観転換のプロセス

学校における地域と連携した教育活動を双方向的につなぎ深めていくための協働研究について

「協働」を支える教師間の自律性と同僚性についての一考察

学校の組織化に向けた取り組み

教師が学べ、実践できる学校づくり 至民中学校教員への道

プロジェクトチームの活動と教師の協働

養護教諭のアイデンティティとその形成プロセスを支える実践コミュニティ 竹内 雅子 学校改革実践研究報告 103

教師が協働する校内研究に向けて

学び合う同僚性が生まれる学校文化をめざして

自ら学ぶ校内研修を探る・求める・広める

実践コミュニティ ものづくりから得られるもの

教員研修機関における研修・支援機能の充実

協働研究をデザインする

主体的に学ぶ子どもの育成を目指した学校づくり

教師主導型の授業からの転換と展開

協働して学びを深める授業をつくる

長期実践で子どもの成長をたどる

「探究するプロセス」を問い直す

勝見 浩文 学校改革実践研究報告 97

川端 英郁 学校改革実践研究報告 98

北 典子 学校改革実践研究報告 99

高橋 彰男 学校改革実践研究報告 100

高間 祐治 学校改革実践研究報告 101

滝 民恵 学校改革実践研究報告 102

多田 昌弘 学校改革実践研究報告 104

多田 敏明 学校改革実践研究報告 105

辻村 完 学校改革実践研究報告 106

富田 裕之 学校改革実践研究報告 107

西村美貴穂 学校改革実践研究報告 108

早川 勇治 学校改革実践研究報告 109

松井 昭男 学校改革実践研究報告 110

宮腰 貴久 学校改革実践研究報告 111

名葉 浩行 学校改革実践研究報告 112

水野 雅人 学校改革実践研究報告 113

森田 史生 学校改革実践研究報告 114

Schedule

- 4/2 sat** 開講式
4/23sat -24 sun 合同カンファレンス (9:30-17:00)
5/21 sat 合同カンファレンス (9:30-12:30)
6/3 fri 福井大学附属中学校研究集会
6/25 sat -26 sun 実践研究福井ラウンドテーブル

[編集後記]

ラウンドテーブル特集号ということで、年度末のご多忙の最中に多くの参加者の方々に原稿を執筆いただきました。心から感謝申し上げます。ラウンドテーブルの余韻がまだ冷め切らない3月11日に、未曾有の震災と津波が東北地方を襲い、多数の死者と行方不明者を出す大惨事となっております。該当の地域からも多くの皆様にご参加いただき、心を痛めております。心からお悔やみとお見舞いを申し上げますとともに、被害を受けられた皆様方の一日も早い復興を衷心より願うばかりです。とりわけ、子どもたちの笑顔が一刻も早く戻りますように・・・福井の地より、万感の思いで祈っております。(津田由起枝)

教職大学院 Newsletter **No.30**

2011.04.02 発行

2011.04.02 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp
